

令和4年度 卒業生満足度調査結果報告書

〔 群馬医療福祉大学 〕

本調査は毎年実施している「在学生満足度調査」から、令和4年度に実施した卒業見込みの4年生（対象226人、回答195人、回答率86.3%）にかかる調査結果を抽出して報告するものである。

分析にあたっては主な質問事項において「満足していた」と「どちらかという満足していた」を「満足グループ」、「不満であった」と「どちらかという不満であった」を「不満グループ」とし「どちらともいえない」を加えた3分類として比較検討する（項目によっては5分類の場合もある）。

問1 入学決定時の気持であるが「満足」は77%、「不満」は6%となっており、昨年度と比較して満足の割合が4ポイント増加し、不満の割合はほぼ横這い状態である。

問2 教育理念について知ったのは「入学前から」は61%、「入学後」は37%となっており、昨年度とほぼ同様の結果を得られた。すなわち、オープンキャンパス・広報活動、出前授業などによって本学の教育理念が浸透し、また入学後のフレッシュャーズセミナーなどによってほとんどの学生が理解していることが読み取れる。「今回初めて知った」が昨年度と同様の2%となっている。しかし、入学後も含めれば大多数の学生に教育理念が浸透していることが窺える。

問3 教育目標についても問2と同程度の水準98%理解している。今回初めて知ったという者も昨年度と比べて1ポイント減少し2%となり年々改善されている。

問4 次に、「教育理念」や「教育目標」を感じる機会としては、2021年度は「講義を受けている時」（29%）や「単位認定をされるボランティアを行っている時」（13%）が上位を占めていた。2022年度は「講義を受けている時」が40%になり、11ポイント増加した。これは対面での講義がコロナ前のように戻ってきており、教員の指導が行き届いていると考えられる。ただし、「実験・実習に取り組んでいる時」が4ポイント減少し、「授業で発表している時」が3ポイント減少しており、学生の行動面について減少している。

問5 教育に関する取り組みの満足度は「基礎教育」「専門教育」、「総合演習・卒論指導」「基礎演習」、「キャリア支援・就職支援」「資格取得対策講座」、「クラス担任制」など、調

査内容のほとんどにおいて、満足と回答した者が 70%を超えている。これは昨年度と同様である。大きな伸びを示した項目は「クラス担任制」であり、「満足」の項目が昨年度 71%から 6 ポイント増加し 77%となった。そのうち「満足している」のみの項目は 11 ポイント増加し 41%となった。担任教員の学生への指導・対応に力を入れている結果が出ていることが窺える。

問 6 学生が何に意欲的に取り組んできたかの問いには、「専門的な知識を身につける」と「幅広い教養を身につける」を選んだ学生が多く、この傾向は昨年度同様である。次いで「資格取得の対策を行うこと」が続いており、3 ポイント増加の 19%と割合的には最も伸びている。

問 7 受講してきた授業での不満についての問いには、「不満な授業はない」が最も多く、これはアンケート開始以来、首位を保っている。また「教員の一方的な授業」の回答者が昨年度より 4 ポイント減少した。ただし「授業内容が難しいから」が次点となり、13%を占めている。学生が授業内容を難しく感じないように、学生のレベルに合わせて授業を展開していく工夫をする必要がある。

問 8 昨年度とほぼ同様の結果である。「専門分野が充実している」「基礎・教養分野が充実している」「演習・卒論指導」の肯定意見が 70%以上を超えている。しかし「選択できる授業科目が充実している」については 53%となり、昨年度より 12 ポイント減少している。本校の特徴である資格取得にかかる専門科目が多いためでもあり、やむを得ない一面もある。その一方で「高校で学んできたこととの結びつきがわかる授業が多い」の回答割合が 49%となり、昨年度から 8 ポイント増加した。今後もカリキュラムの改善を通じた、魅力のある授業を提供していくことが求められる。

問 9 昨年度と同様に、本学の教員に関しては「教育指導に熱意をもっている」や「授業中、学生の質問や意見に適切に対応してくれる」などの設問項目において 70%以上の学生が高い評価をしている。「授業の進め方や指導方法をよく工夫している」「教育や指導に熱意をもっている」「勉学意欲をもたせてくれる」については、「とてもあてはまる」の回答割合が昨年度から増加した。しかし「とてもあてはまる」「まああてはまる」両方含めると、割合が昨年度に比べて全体的にわずかに減少している。

問 10 昨年度と同様に「社会の規範やルールに従って行動する力」や「相手の意見を丁寧に聞き内容を正確に理解する力」など、多くの設問に対して医療・福祉を学ぶ学生としての基本的なことを本学で修得できたと学生は認識している。ほとんどの項目で「身についたと思う」や「身につけたいと思う」の回答割合が増加している。ただし、「ある

程度身についたと思う」や「ある程度身につけたいと思う」の回答割合が減少しているため、肯定的な回答割合全体はわずかに減少傾向が出た。肯定的な回答割合が最も増加したのは「数式や図表を使って表現・分析する力」であり、昨年度から7ポイント増加し69%を占めた。これは、具体的に数値を挙げて解析し客観的に行動する力が身についたという結果が出た。なお、今後さらに身につけたい事項としては「コミュニケーション能力」に関するものが昨年度と同様に多い。

問1 1 本学への総合満足度では、入学して「よかった」「どちらかというよかった」両方含めて70%となり、昨年度の76%から6ポイント減少した。入学して「よくなかった」「どちらかというよくなかった」両方含めて11%となり、昨年度5%から6ポイント増加している。ただし、入学して「よかった」だけの項目は32%で、昨年度の27%から5ポイント増加しているので、「よかった」と「よくなかった」で分かれる二極化の傾向が出た。

問1 2 所属していた学科への満足度は「満足」が77%で1ポイントの減少、「どちらともいえない」は20%で2ポイントの増加、「不満」は3ポイントとなっている。今後とも学生の「どちらともいえない」「不満」をどのようにして「満足」させていくかが課題である。

まとめ

職場や地域社会などで仕事を始めていくことが間近な卒業年次の学生は、社会人として習得しておくべき能力について、十分でないと考えていることが今年度もアンケートから窺える。経済産業省が2006年に提唱した「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」（主体性、働きかけ力、実行力）、「考え抜く力」（課題発見力、計画力、創造力）、「チームで働く力」（発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力）の3つの能力（12の能力要素）から成り立っているが、本学の多くの卒業生は、主体性、実行力、協調性などの社会人基礎力を身につける必要性を痛感しており、これら今年度の結果も昨年度と同様にこの傾向が続いていると言える。

2021年度は、教員・学生間の「ウィズコロナ禍」にあってどのようにコミュニケーションを図るかが問題であった。遠隔操作の普及や緊急事態宣言の解除・まん延防止等重点措置の解除・緩和化による人的交流の回復が学生の満足度向上に大きく影響されることが見て取れた。2022年度は対面授業が基本となったことにより、授業時の満足度向上やクラス担任制の高評価に繋がり、教員と学生とのコミュニケーションが向上したことが回答結果に出た。このことは改めて我々に、人と人との交流が相互理解とコミュニケーションにどれほ

ど重要であるかを再認識させるものであると言えよう。

本学社会福祉学部では2019年度から1年生全員を対象に「サービス・ラーニングⅠ」の科目を開講した。(2022年度は開設4年目)この科目は大学近隣の地域の様々なフィールドにおける課題解決のために取り組み・企画することを通じて、地域社会の様々な実践に触れて、学生自身の学修の深化とコミュニケーション能力・社会性・協調性・行動力といった社会人基礎力を培うことを目的としている。少しずつではあるが、サービス・ラーニングを昨年受講した学生の中から、地域に出向き地域住民と共同して企画・運営をしている者も出てきている。

「サービス・ラーニング」を受講した2019年度の1期生が2023年4月より社会人となる。この卒業生の中から、更に地域住民との共同による企画・運営を実施する者が出てくることが期待される。長期的な視野に立ち、「自立」そして「共生」に向けた主体性を身に付けていくことが、本学学生の身につけたいと考えている社会人基礎力の強化にも繋がる。そのためにも教員・学生の協働による授業内容の点検及び検討、学生アンケートから抽出される検討事項の速やかなるフィードバックなど、PDCAサイクルを機能させ、今後も教育の質向上に努めていく必要がある。